

知られざる北尾次郎 ——物理学者・小説家・画家——

西脇 宏*・猿田 量**・若林一弘***

Der unbekannte Diro Kitao
—— Physiker, Romancier, Zeichner ——

Hiroshi NISHIWAKI, Hakaru SARUTA, and Kazuhiro WAKABAYASHI

はじめに
I. 資料の現状
II. 年譜
III. »Waldnymphe« の
挿画について
おわりに
註
文献一覧

郎の遺稿を目にし、われわれはこの不当にも
忘れられた人物の事績の調査を開始した。

これはその最初の報告である。

次郎の遺稿の中心をなすのは、Korkzieher
(コルク抜き)の筆名で執筆し、自ら挿画を描
いた、未発表の独文長編小説»Waldnymphe«
(「森の女神」)である。しかしながら、後述
のような保存状態と、5,500ページを越える紙
数のため、残念ながら今回はその内容に詳しく
立ち入ることはできなかった。

今後の研究の基礎データとして、まず資料
の現状を紹介し、次に、伝記に代えて年譜を
作成した。これは現在のところ、北尾次郎に
関して存在する唯一の年譜である。さらに、
»Waldnymphe«の挿画の中から15点を選び、
その解説を試みた。次郎の知られざる側面を
紹介するのに、視覚に直接訴えるのが一番の
捷徑だと考えたからである。また最後には詳
細な文献一覧を付した。

はじめに

北尾次郎の名前は忘れ去られている。

物理学者としての次郎は、歴史的評価とい
う名の墓所に葬られ、存命中においてさえ知
られざる側面であった小説家、画家としては、
いまだかつて評価の対象にすらなることが
なかった。

偶然のきっかけで島根県立図書館所蔵の次

* 島根大学法文学部ドイツ語学・ドイツ文学
研究室

Shimane University, Matsue, 690 Japan.

** 島根大学教育学部美術科研究室

*** 島根大学山陰地域研究総合センター客員研
究員

I. 資料の現状

北尾家は昭和20年5月の横浜大空襲で全焼
し、次郎の遺品はほとんど失われたが、疎開
してあった稿本類は幸い焼失をまぬがれた。

それらの稿本は、次郎と同名の孫北尾次郎氏により、昭和44年、前後2回に分けて島根県立図書館に寄贈された。以下の3種がある。

- A. Waldnympe 22冊(1979.5.24寄贈)
- B. 手帳 18冊(1979.10.31寄贈)
- C. Dynamik 7冊(1979.10.31寄贈)

以下順次その現状を述べる。

1. Waldnympe

1894年に製本されたと思われる挿画入りの独文小説の手稿である。

背とコーネルは茶色の布。表紙の色と挿画の点数については下記参照。表紙の寸法は22×17cmである。

損傷が激しく、背表紙のないものが7冊ある。表紙はたいていがちぎれている。ページもはがれてしまったものがあり、また明らかに別の巻からの紛れ込みと思われるページもはさまる。挿画は糊付けして入れてあるが、3分の2くらいはがれてしまっている。また切り取られてしまった挿画も相当数に上る。次郎の形見として親戚、知友に配られたことがあるらしい²⁾。

紙の質は一定でなく、インクの色も時々変わる。目次はなく、ノンブルも、いくつかの巻で赤で部分的に打ってある以外は、ほとんど書き込まれていない。

見開いた2ページの左側に本文を書き、右のページは加筆補筆のために使われている。訂正箇所は上に紙片を糊で貼って直している。挿画の前のページとその裏の2ページは原則として白紙である。

本文ページのみを数えると、22冊で5,500

ページを越え、1冊平均は約250ページとなる。以下に現時点で確認した挿画数を各巻ごとに整理して示す。個々の挿画が本来その巻に含まれていたものかどうかは、今後の詳細な検討を要するので、これはあくまで概数にすぎない。Cは彩色ペン画、Mは無彩色のペン画、Pは鉛筆画を示している。

背文字	表紙の色	挿画数			その他
		C	M	P	
I 2	アズキ	23	21	2	墨 1
I 3 (I) ³⁾	〃	24	14	1	
I 3 (K)	〃	28	15	1	
II 1	〃	25	12	1	
II 2	〃	37	16	1	
II 3 ⁴⁾	〃	31	18	0	
III 1	黒地に黄	29	13	1	
III 2	〃	36	15	1	
III 3 (V 1) ⁵⁾	〃	42	16	1	
III 4 (VI 2) ⁶⁾	〃	43	26	2	
IV 2	〃	47	8	2	
IV 5	〃	43	9	1	
V 4	〃	43	14	1	色鉛筆1
V 5 ⁷⁾	表-黒地に緑 裏-黄地に黒赤緑	33	16	1	
VI 1 ⁸⁾	黒地に黄	51	10	0	
ナシ①	アズキ	46	10	3	
ナシ② ⁷⁾	表-黄地に黒赤緑 裏-黒地に緑	48	8	1	
ナシ③	黒地に黄	46	16	0	
ナシ④	〃	36	10	1	
ナシ⑤	〃	51	11	1	
ナシ⑥	〃	42	14	1	
ナシ⑦ ⁹⁾	〃	40	11	3	

▶Waldnympe◀全編の巻数については、次

郎の追悼文を書いた人のうち4人が言及している。佐々木忠次郎が15冊、稲垣乙丙が「二十有三冊」、鳥屋部春汀と中村清二が27冊としている。

22冊が現存しているのであるから、佐々木説は何かの間違いであろう。背文字のローマ数字を横に、アラビア数字を縦に並べると以下のようなになる。

I	II	III	IV	V	VI
○	1	1	○	1	1
2	2	2	2	○	2
3 I	3	3	○	○	
3 K	◎	4	○	4	
◎	◎	◎	5	5	

巻数の表示のある17冊に上表の○の6冊を加えれば、計23冊となる。VIは最終巻であるから例外として、さらに仮に◎の4冊を加えれば計27冊となり、総数が27冊だった可能性も十分に考えられる。

次に各巻毎にその中に含まれる章題を列挙する。

背文字

I 2	Des Götterliebblings Meisterjahre Wieder Verwaist Des Götterliebblings(II) Wanderjahre!
I 3 (I)	Im Irrpfade Ein starres Herz In Hochfluth
I 3 (K)	Kinder des Hauses Das Aschenputtel Pandaemonium

	Eine lustige Gesellschaft Kinder der Welt
II 1	Ein Unwetter Der Pfarrer von Seefeldt
II 2	Demosthenes im Werden Weltflucht Auf dem abschüssigen Wege Eine Idylle durch Feld und Wald
	Ein Daemon der Lüge Vom Gipfel in den Abgrund
II 3	Der verirrte Knabe Des Waisen Knaben Lehrjahr Eine Dulderin
III 1	ナシ
III 2	Die Märchenprinzessin Der Aristokratische Jurist Ein Staatsmann auf seiner Höhe
III 3 (V 1)	Unter dem Fluch der Todten Der lachende Sünder Unter den Todten und Verwandten
III 4 (VI 2)	Ende gut und Alles gut? Ein inwendiger Professor
IV 2	In der Höhle des Mörders In der milden Fremde Das Grab einer Dulderin Ein Narr
IV 5	Eine Bauernhochzeit Ein Diener der Todten Eine wahrhaftige Pandora Des Götterliebblings Erdennoth
V 4	Der Pudel Fidel Die letzte Pandora
V 5	Bei dem weisen Magier

	Alles um ein Phantom		schafft
VI 1	Heimkehr eines Vaters		
	Ein Begrabenes Heldenleben	2.	手帳
	Laseiale ogni 'speranza		4種別がみとめられる。
	Eine Botschaft der Todten	1	革装 18×11cm 1冊
ナシ①	Die Verstossenen		覚書き下書きの類。
	Der Engel des Gerichtes	2	a 半革装 (表紙厚い)
	Wieder in den Tod gegangen		17×11cm 2冊
ナシ②	Ein Fürstensohn		雑記。
ナシ③	Gefangen		b 半革装 (表紙厚い)
	Eine Schwester		16.5-17×10.5-11cm 7冊
	Eine Festkönigin		数式。
	Der Brand	3	a クロス装
	Der verlorenen Sohn (ママ)		16×10cm 4冊
	Zu Spät		数式。(講義のための控えか)
	Der letzte Strahl am Abgrunde		1冊を除いて表題が表紙に貼り付けてある。
	Eine wilde Ernte		»Vorlesungen über / Höhere Analysis III «
	Bemerkungen des Abschreibers		»Methode der / kleinsten Quadrate«
ナシ④	Im Abgrund		»Höhere Analysis II / Vorlesungen / über Integralrechnung / von / Di-
	Dem Tode entgegen		ro Kitao / Unterlehrer«
	Die Geschichte eines Mörders		
ナシ⑤	Ein aesthetischer Abend		b 紙装 (ごく薄い)
	Aspasia		17×10.5cm 1冊
	Ein Märchen aus dem Bremer Rathskeller		»Mathematische / Physik / Optik I «
	Der treue Jugendfreund	4	a 半革装 (表紙厚い)
	Ein zerfahrener Erdensohn		16.5×10.5cm 1冊
ナシ⑥	Goldüberschüttet		b クロス装 (表紙厚い)
	Ein Enfant terrible		16.5×10.5cm 1冊
ナシ⑦	Abgründe im Gipfel		C 革装 16×10.5cm 1冊
	Jagd nach einem Wolkenbilde		以上3冊は物理学, 数学の講義録の稿
	Aristokratische Pilgerfahrt		本か。図入りで小さな文字で書かれて
	Eine ernste Geisterstimme		いる。
	Eine Penelope der Gesell-		

3. Dynamik 21×18cm
背表紙とコーネルは赤い布、表紙は緑色に赤が入っている。

背文字：Diro Kitao / DYNAMIK

その下に巻数 I₁, I₂, II₁, II₂, II₃, III₁, III₂ 物理学の稿本である。

II. 年 譜

嘉永7年(1854)¹⁰⁾

7月4日、松江城下片原町(現松江市片原町)に、藩医松村氏7世寛裕の次男¹¹⁾として生まれる。初名は録次郎。兄弟は、長男寛蔵、長女キン(早世)、3男鏝三郎(早世)、次女セキ(西山樗三郎に嫁す)、3女エイ(福田豊吉を婿にむかえる)。実母ヒナは山口五郎兵衛の長女で、次女セツの次男桑原羊次郎と次郎は従兄弟同士であった。

文久元年(1861) 7歳

このころ、外祖父山口五郎兵衛(巻石)等の指導により、四書五経の素読をする。

元治元年(1864) 10歳

このころ松江藩の鴻儒内村鱸香の門下生となる。

慶応2年(1866) 12歳

このころ文選、史記、通鑑等を通読する。また、後の養祖父北尾徳庵宅の詩文会にもしばしば参加する。

明治2年(1869) 15歳

2月、東京開成学校でフランス語を習得¹²⁾。同時に箕作麟祥塾にも入る。

3月より、兄寛蔵大阪病院で蘭医ボードインについて学ぶ。

8月29日、北尾漸一郎の養嗣子となる。北尾家は松江藩御側医の筆頭の家柄であり、漸一郎は洪庵の適塾や長崎の精得館

で学んだことのある蘭学者でもあった。12月、開成学校が大学南校と改称され、次郎はそこで英語・究理学(自然科学)を学ぶ。

明治3年(1870) 16歳

閏10月、ドイツ留学生に抜擢される。

11月9日、留学報告のため、松江藩主(松平定安公)に謁見し、下賜品を受ける。

12月、アメリカ経由ドイツ留学のため、Great Republic号で横浜から出航。同行者は伏見満宮殿下(後の北白川能久親王)、西園寺公望、森有礼等、総勢37名であった。東校留学生としては、次郎の他、池田謙齋、相良元貞、山脇玄、大石良乙、荒川邦造、尾崎平八郎、今井巖、大澤謙二がいた。次郎は一行中の最年少であった。

明治4年(1871) 17歳

ギムナジウム教員Wagnerのもとで、ドイツ語、論理学を学び、傍ら文学、歴史、美術、音楽、政治、算術等の諸学を修める。

明治5年(1872) 18歳

実祖父松村徳潤死去。

北尾漸一郎陸軍軍医に任ぜられる。

明治6年(1873) 19歳

2月、ベルリン大学入学。Helmholtz, Kirchhoff, Kummerらのもとで、物理学・数学を学ぶ。

6月、文部省官費給与の制度を廃止する。以後、数学の家庭教師、新聞雑誌への寄稿等で、養父よりの送金を補い勉学を続ける。また当時のアメリカ領事Fritz Meyer等より学資の援助を受ける。

8月、養祖父北尾徳庵、家を挙げて東京牛込区神楽坂へ転居する。

- 11月24日、北尾徳庵逝去。
- 明治7年(1874) 20歳
片原町の松村家火災にあう。
- 明治11年(1878) 24歳
2月、色彩感覚を物理学的に取り扱った論文「Zur Farbenlehre」により、Göttingen 大学より、PHILOSOPHIE DOCTOREM ET ARTHUM LIBERALIUM MAGISTRUM の学位を受ける。
その後再びベルリン大学に戻り、Helmholtz のもとで実験に従事する。
- 明治14年(1881) 27歳
「Waldnymphen」の挿画のうち、年号の書き込みのあるペン画の大部分はこの年のもの。
- 明治15年(1882) 28歳
春より、本願寺大教正北嶋道龍師の案内役をつとめる。
- 明治16年(1883) 29歳
7月、北嶋道龍とともにウィーン郊外ヴァイトリンガウで、当時の高名な政治学者Lorenz von Stein の講義を聞く。
10月2日、プロシア国ブランデンブルク州の人、トップアルベルチーネ(Topp=Albertineか?) 3女、Louise (Luiseとも表記する)と婚約。
12月、帰朝。
- 明治17年(1884) 30歳
2月、文部省御用掛大学理学部勤務。
5月、東京にてLouiseと結婚。Louiseの戸籍名は留枝子。
6、7月頃、Louiseとともに一時帰郷する。
8月23日、北尾漸一郎東京下神田区へ全戸転籍する。
- 9月19日、実父松村寛裕没す。
10月1日、長男富烈(ドイツの男児名Fritzに倣ったもの)生まれる。
11月、『普国憲法起源史 上巻』を弘道書院より刊行。
- 明治18年(1885) 31歳
6月20日、東京大学教授に任ぜられる。
7月6日、正7位に叙せられる。
11月、農商務省御用掛兼務となる。東京山林学校教授心得を仰せ付けられる。
- 明治19年(1886) 32歳
1月、農商務省御用掛兼務をとかれる。
4月19日、東京山林学校教授に任ぜられ、奏任官に叙せられる。
7月22日、東京農林学校教授に任ぜられる。
6月頃、次男兵馬(ドイツの男児名Hermannに倣ったものか)生まれるが、脳膜炎のため生後39日で死亡する。
12月23日、理科大学教授兼任となる。
- 明治20年(1887) 33歳
「Beiträge zur Theorie der Erdatmosphäre und der Wirbelstürme」(「地球上大気ノ運動及颶風ノ理論」)を『理科大学紀要』第1冊第2号に発表する。
- 明治21年(1888) 34歳
9月26日、海軍教授兼理科大学教授兼任となる。
- 明治22年(1889) 35歳
次郎よりドイツ文学の講義を受けるため、巖谷小波週一回次郎宅に通う。
「地球上大気ノ運動及颶風ノ理論」続篇を『理科大学紀要』第2冊第5号に発表する。
- 明治23年(1890) 36歳
6月20日、農科大学教授となる。

- 明治24年 (1891) 37歳
8月24日, 理学博士の学位を受ける。
- 明治25年 (1892) 38歳
9月, 帝国大学評議官を兼官する。
10月19日, 北尾家より分家。四谷区信濃町29番地に住む。(居宅は次郎自身の設計になる洋館であった。)
この年、『東京数学物理学会記事』5に6篇の論文を発表する。
- 明治26年 (1893) 39歳
9月, 農林物理学気象学講座担任となり, 帝国大学理科大学教授兼任を解かれる。
同月21日, 帝国大学評議員となる。
- 明治27年 (1894) 40歳
»Waldnymphe«を製本する。
- 明治28年 (1895) 41歳
「地球上大気ノ運動及颶風ノ理論」続篇を『理科大学紀要』第7冊第9号に発表する。同論文は独文で300ページに垂んとする大論文として, ここに完結した。
- 明治29年 (1896) 42歳
7月10日, 従5位に叙せられる。
- 明治31年 (1898) 44歳
7月19日, 高等官2等に叙せられる。
9月10日, 正5位に叙せられる。
罹病。青山胤通博士の診察により糖尿病とわかる。
- 明治33年 (1900) 46歳
12月20日, 勲4等瑞宝章を受ける。この年から翌年にかけて, > Der dumme Michel くを『独逸語学雑誌』に連載する。
- 明治35年 (1902) 48歳
3月13日, ヨーロッパ各国へ派遣される。
12月16日, 高等官1等に叙せられる。
- 明治36年 (1903) 49歳
4月, 帰国する。帰朝の途次インド洋上で病状が悪化する。
同月10日, 従4位に叙せられる。
12月26日, 勲3等瑞宝章を受ける。
- 明治37年 (1904) 50歳
4月10日, 実母松村ヒナ没す。
- 明治39年 (1906) 52歳
6月, 文官分限令により休職。
豊多摩郡代々幡村字代々木に別宅を新築し, 静養に努める。
- 明治40年 (1907) 53歳
9月7日午後3時, 脳脊髄神経麻痺で死去。同日付けで, 正4位に叙せられる。
9月10日, 青山斎場において, 神式にて葬儀が営まれる(斎主は山口権大教正。)
青山南町3丁目玉窓寺に葬られる。
- 明治42年 (1909)
»Die wissenschaftlichen Abhandlungen von Dr. Diro Kitao«(『北尾博士論文集』)が稲垣乙丙の編により, 大日本図書株式会社より500部限定で刊行される。

III. »Waldnymphe«の挿画について

1. 日本人の西洋画製作の初期の一例としての意義

独文小説»Waldnymphe«の1,000点をこえる挿画は, 北尾次郎が職業的な画家でなかったという限定にはあるにせよ, 素人離れした達成度を持つこと(第1図)のほかに, 幾つかの重要な意義を有している。

第一は, 北尾次郎が明治政府による最初期の留学生であったことで, »Waldnymphe«挿画は, ヨーロッパの素材と手法で西洋紙に鉛筆またはペンとインク, あるいは水彩絵の具で描かれた滞欧日本人による最初期の作品に

数えられることである。幕末より日本には西洋絵画を学ぼうとする動きはあったが、直接に欧米の世界と美術に接しえた者は、彼以前あるいは同じ時期にはわずかに国沢新九郎や川村清雄、山本芳翠があるに過ぎない。ドイツに限れば、森鷗外との交流を知られる原田直次郎の留学は北尾次郎が帰国した翌年の明治17年である。

第二に、大量の裸体像、裸婦像を描いたことである。『Waldnymph』挿画は結局、公開されなかったもので、一般的影響はなかったが、錦絵春画を除けば、これだけの数量の裸体像を描いた日本人画家はこの当時見られない。

さらに、アマチュアの西洋美術受容の例証の面がある。彼が日本で少年期までをすごした幕末から明治初期は、木版の挿絵本が大量

に生み出されていた時期であったが、彼が10代後半から20代を過ぎた普仏戦争以後のドイツも挿絵本の流行期であった。こうした環境の中で彼の製作は挿画小説の形をとったと思われる。したがって、『Waldnymph』挿画には東西の挿絵本の反映が見出され、ある個人、それも理数学者の中で両者の混交を生じていることが興味深い。また小説の挿画ということから離れても幕末人と西洋美術との関係を物語る重要な事例であることは間違いない。

2. 小説『Waldnymph』本文と挿画の関係

本文そのものの構成が現状では見通せないため、本文と挿画との対応関係の有無も明確には掴みがたい。

特定の表情の女性や男性が幾度も登場し、その人物の持物の剣、盾、腕輪などが反復し



第1図 第II-3巻 5図

て描かれる（第2，9，10，12図）ことから、挿画が物語になんらかの対応をなしていることは間違いないが、まったく物語性を感じさせない裸婦習作も含まれている（第3，8図）。そこで、本文との対応関係は次の機会にゆずることにし、素材と技法およびモチーフについて若干の考察を試みる。

3. 素材，技法による主要な三つのタイプ

これらの挿画の製作は、本文と同様にかなり長期間にわたったと思われる。1,000点をこえる数量の製作は小画面とはいえ多大の時間を要したはずであるが、かなりの加筆訂正をも行っており、多数の切り貼り、修正がある。鉛筆、ペンとインク、水彩絵の具の併用例が多く見だされるのは、意図した結果とも加筆の結果とも考えられる。

画面に明確な年記のある作品があることと、手稿の製本年次からおおよその製作年代が推定できる。すなわち1881年の記入のある一連のペン画の存在と、散見される1880年、1882年の作品がほぼ同一のペンさばきを見せ、かつ用紙が同一であることから、同一の用紙に主としてペンとインクで描かれた作品は、おおむねその数年間の製作と判断される（第4，5，6，7図）。また水彩絵の具による着彩画面のかなりの部分が、日本文字が記入された製図用紙の反古を用い、その裏面に製作されていることから、着彩画面の多くは帰国後の製作と判断される。》Waldnymphé《手稿の製本が1894年であることから挿画の基本的部分はこの時までに製作を終えていたと思われる。鉛筆による画面はクロス・ハッチングを多用するなど描線の性格ときめの粗い用紙を用いる点で異なる時期に属すると考えられるが、画風が習作的であることからペン画や着彩画に先行していると思われる（第3，8図）。



第2図 第II-2巻 5図



第3図 第III-1巻 9図



第4図 第II-1巻 32図



第6図 第III-2巻 19図



第5図 第III-1巻 28図



第7図 第III-2巻 12図

ここで上述の3タイプを要約する。

a. きめの粗いデッサン用紙に鉛筆

着想は人体中心で背景・環境は二義的，クロス・ハッチングで人体の起伏を表現しようとしているが，あまり効果がなく，平板である。登場人物の印象は西洋的である。(第3, 8図)

b. 滑らかな紙にペンとインク

人物像中心であるが，三人以上の場合も多く，群像としての構成が意図され，着想の当初から背景の風景や建築物・室内空間と人体像の呼応がある(第5, 6, 7図)。人体の内部に起伏の描写が多くはなく，ある密度で描かれた背景によって浮立つように意図されている。肉体の起伏と運動を現すために加えられる若干の描線のために，男性のみならず女性までが筋肉質の印象を与える(第6図)。日本的なモチーフも登場する(第4図)。

c. ペンとインクに水彩絵の具による着色

このなかには，当初a. またはb. のタイプであった画面に加筆着色したものと，着色を前提にした構想のものがあると見られる。構想から着色を意図したものは，練達度から判断して，最も挿画に集中していた頃のものと思われ，完成度の高いものが多い(第10図)。とくに風景描写の比重が大きく，それが物語り性を感じさせるもの(第11, 12図)と，画面を錦絵に見られるように小画面に分割するもの(第11, 12図)，女性を単独で描いたもの(第2, 14図)などがある。モチーフに日本的なものが多くなる(第9, 13図)。

北尾次郎は画面を縦長にも横長にも用いるが，それには時期的な傾向は認められない。

4. 製作手順の推定

北尾次郎はおそらく鉛筆によって基本的な製作をしていたと推定される。ペンや着色で



第8図 第II-1巻 27図

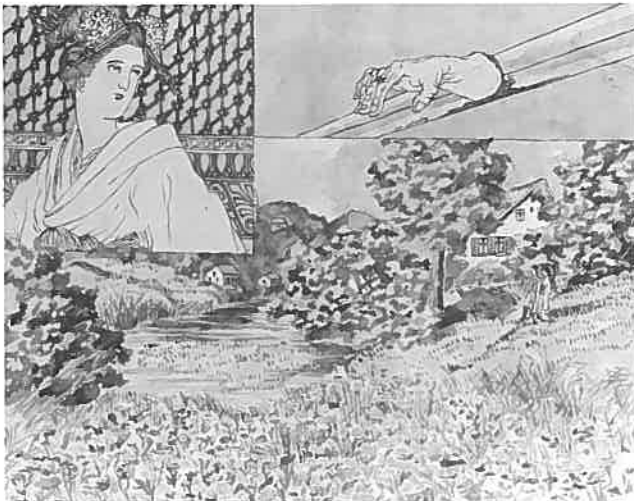


第9図 第III-2巻 44図



第10図 第II-3巻 32図

第11図 第II-2巻 23図



第12図 第II-1巻 26図

完成された作品も下書きは鉛筆によってなされたことは、鉛筆線の痕跡や、挿画の裏面に残された失敗作から明らかである。また彼の製作は人物中心で、とりわけ頭部の出来映えに拘泥していたと思われる。断片の多くが、容貌からペン描きを着手され、その不首尾が放棄された理由と推定されるからである（第14、15図）。

〔ここに紹介した挿画は全22巻を通じて選択したものではなく、現在までに写真撮影済みの数巻からのみ取ったものである。〕

各図版に付した巻号数は「Waldnymphe」手稿製本の背文字であり、図号数は各巻の挿画に今回付した仮番号である。〕



第14図 第II-3巻 44図



第13図 第II-3巻 4図



第15図 第II-3巻 44図裏面

おわりに

われわれの北尾次郎研究は緒についたばかりである。»Waldnymph«の遺稿を前にする時、しばしばそのあまりの膨大さに圧倒される思いがする。たとえその完全な翻刻は不可能だとわかっていても、これからはその遺稿を1ページ1ページと読み進めてゆく、困難で根気のいる仕事が残っている。

しかも次郎の本業はあくまで物理学の領域にあったのである。全人的再評価となれば、当然そのことにも触れないわけにはいかないが、この分野での次郎の業績の客観的評価は到底門外漢のわれわれの手に負えるものではない。

しかし、盛夏の県立図書館での「発見」の感動を忘れず、われわれに託された仕事として、これからも地道に取り組んでゆきたい。

われわれの研究は文字通りの共同作業であるが、今回の執筆はIII.を猿田が、それ以外の部分を若林と西脇が担当した。全体の文責は西脇にある。

最後に、資料の貸し出し等に便宜を計って下さった島根県立図書館の郷土資料室の方々、われわれの突然の訪問を快く受け入れ、資料の提供、貴重なご教示等をいただいた、岡 真弘氏、北尾次郎氏、松村富士子氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

註

- 1) »Waldnymph«の邦訳としては、『森の妖精』が適当と思われるが、すべての文献が『森の女神』としている。この邦題が次郎自身に由来する可能性もあるので、ここではそれを踏襲する。

2) 桑原羊次郎『北尾次郎博士の逸話』に、
「予は君の名著『森の女神』の挿繪数百枚中彩色画にて最出来よきペン画二枚を留枝子君より贈られて、今尚ほ之を蔵せり」とある。

3) I 3は2冊ある。その最初に出てくる章題の頭文字を取って、I 3(I) (<Im Irrpfade), I 3(K) (<Kinder des Hauses) とする。I 3(K)の扉には»Waldnymph / II / Eine Familiengeschichte«とある。

4) II 3の扉には手書きで、

Waldnymph

[Arabesken aus Europa]

von

Hans Korkzieher

Mit Bildern von H. Japs.

genannt

Hellenomanos

→×←

Tokyô

1894

Im Verlag von Dr. Diro Kitao

とある。この巻にはプロローグらしき部分に続いてDiro Kitaoの序文があり、背文字の数字とは齟齬するが、全編の第一巻の可能性はある。なお、この巻の背表紙は背に貼りついている。

またこの巻までの背表紙のタイトルは、»KORKZIER WALDNYPHE«で、III 1以降の»KORKZIEHER'S WALDNYPHE«とは微妙に違っている。さらに表紙の色もこの巻を境に変化する。製本時期の違いを推量させる。

- 5) この巻と次の巻は背表紙がだぶっている。表紙、裏表紙ともはがれた状態なので、整理の際に別の巻のものを仮にあてたものと思われる。表紙に続く背表紙は V 1, 裏表紙に続く背表紙には III 1 の数字がある。表紙に »Waldnymph V« と書かれた扉が続く。
- 6) 表紙に続く背表紙には VI 2, 裏表紙に続く背表紙には III 4 の数字がある。
- 7) 表紙と裏表紙の色が異なる。背文字ナシ②の裏表紙だけが本体とくっついているので、こちらが本来のもののはずであり、V 5 と表紙を入れ替えるべきである。なお背文字ナシ②の中ほどに、どこからか紛れ込んだと思われる紙片があり、その表に、 »Waldnymph / Eine Familiengeschichte / III«, 裏には »Ein Fürstenson« の章題が見える。
- 8) 扉に »Waldnymph IV«, V 6 という書き込みもある。
- 9) 扉に »Waldnymph III«
- 10) 嘉永 6 年 (1853) 生まれとする資料が多いが、ここでは桑原雙蛙 (羊次郎) 「北尾次郎の生年月に就て」による。
- 11) ほとんどの資料が次郎を寛裕の長男としているが、寛裕が養子として^{松村}北尾家へ入った後、養父徳潤に実子寛蔵が生まれ、この寛蔵が戸籍上は寛裕の長男であったと考えられる。寛蔵はその後事情があつて廃嫡され、松村家は 3 女のエイが婿を迎えて継ぐこととなる。
- ただ、実子だけを問題とするなら、次郎が寛裕の長男であることに間違いはない。
- 12) 稲垣乙丙によれば、明治元年 2 月開成所入所、12 月大学南校へ移り、2 年 12 月ドイツ留学に出発することになっているが、ド

イツ留学は 3 年 12 月、開成学校が大学南校と改称したのは 2 年 12 月であり、一年づつずれている。したがって開成学校入学も 2 年 2 月のことと思われる。ちなみに 1868 年 2 月はまだ明治に改元されてはいない。

文献一覧

(著作は年代順に、邦文の参考文献は著者の 50 音順に、欧文の参考文献は著者のアルファベット順に、それぞれ配列した。)

I. 著 作

1. 著 書

»Zur Farbenlehre«, Inaugural-Dissertation / zur / Erlangung der Doctorwürde / vorgelegt der / Philosophischen Facultät / der Universität / Georgia-Augusta / zu / Goettingen / von / Diro Kitao / aus Japan, Berlin 1878, 32pp. 独逸理学士北尾次郎編述、山陰学生内村邦蔵校字：『普国憲法起源史 上巻』、東京弘道書院 明治 17 年 (1884)、206pp. 海軍大学校教授北尾次郎著 (稲垣乙丙筆記)：『物理学実験之手引』、海軍大学校 明治 26 年 (1893)、80pp.

»Die wissenschaftlichen Abhandlungen von Dr. Diro Kitao, weil. Professor der Physik und Meteorologie an der Kaiserl. Universität zu Tokyo«, hersg. v. Prof. Dr. I. Inagaki, Tokyo 1909, 470pp.

(邦題：『北尾博士論文集』、稲垣乙丙編、大日本図書株式会社 明治 42 年。)

2. 学術論文

- (○印は上記『北尾博士論文集』に収録されている)
- > Leukoskop, seine Anwendung und seine Theorie <, 『東京大学紀要』(≒Memoirs of Tokyo Daigaku) 12, 明治18年(1885).
 - > Ryūtai-Ryokugaku no Kenkyū <, (「流体力学の研究」, ローマ字書き), 『東京数学物理学学会記事』 I - 3, 明治19年(1886), P. 6 - 12.
 - > Beiträge zur Theorie der Bewegung der Erdatmosphäre und der Wirbelstürme I <, 『理科大学紀要』 1 - 2, 明治20年(1887), P. 113 - 209.
 - > Beiträge zur Theorie der Bewegung der Erdatmosphäre und der Wirbelstürme II <, 『理科大学紀要』 2 - 5, 明治22年(1889), P. 299 - 412.
 - 「題シタル方向ノ風ニ因テ吹き吹き膨ラス帆木綿ノ形状」, 『数理会堂』 4, P. 18 - 20 ; 7, P. 26 - 28 ; 8, P. 8 - 10, 1889.
 - > Über die Darstellung der analytischen Gleichungen für nicht homogenen Curven und Flächen <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 136 - 166.
 - > Über die Integration der durch die Fourierschen Doppelintegrale darstellbaren discontinuierlichen Functionen <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 167 - 174.
 - > Eine Methode, mittelst zweier rechtwinkligen lineare Cubikwurzel zu finden <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 175 - 176.
 - > Über die Transformation des Ausdruckes $\Delta\phi$ auf Linien, welche die Oberflächen $\phi = \text{const.}$ senkrecht durchsetzen <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 177 - 180.
 - > Über das Gesetz der Reibung <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 181 - 189.
 - > Über die electricischen Messungen <, 『東京数学物理学学会記事』 I - 5, 明治25年(1892), P. 190 - 214.
(この論文は、林学博士白沢保美の訳により『高等学術講義録』に収録された「電気測定について」と同一論文と考えられる.)
 - > Beiträge zur Theorie der Bewegung der Erdatmosphäre und Wirbelstürme III <, 『理科大学紀要』 7 - 9, 明治28年(1895), P. 283 - 402.
 - > Über die Wasserbewegung in Böden <, 『農科大学学術報告』 3 - 1, 1897, P. 1 - 113.
 - > Über Schwinden und Quellen der Hölzer <, 『農科大学学術報告』 3 - 4, 1898, P. 299 - 370.
 - > In wie ferne kann man das Holz als ein isotroper Körper betrachten? <, 『農科大学学術報告』 5 - 1, 1902, P. 1 - 39.
(この論文のタイトルは、稲垣乙丙の「略伝」では、> Inwiefern kann man das Holz als einen isotropen Körper betrachten? <と訂正されている.)

3. 創作, その他

- »Original«もしくは»Witz«として, »Zeitschrift für deutsche Sprache«(邦題:『ドイツ語学雑誌』)に, 1-3(1899)より2-14(1900)まで, ドイツの逸話を独文で紹介する。
- »Der dumme Michel«,
»Zeitschrift für deutsche Sprache«(邦題:『ドイツ語学雑誌』)に, 3-1(1900)より4-4(1901)まで, 中断をはさみ連載。
- »Seltsame Geschichte eines armen Unterlehrers«,
»Zeitschrift für deutsche Sprache«(邦題:『ドイツ語学雑誌』)4-9(1902)と4-11(1902)に掲載。
- »Waldnympe« 22冊(手稿)。
島根県立図書館蔵。
- »Dynamik« 7冊(手稿)。
島根県立図書館蔵。
- 「手帳」 18冊。
島根県立図書館蔵。

稲垣乙丙は上記以外の創作活動にも言及しているし, 鳥屋部春汀によれば, 袈裟御前を題材とした史劇『あづま』があるとのことである。

また, 『小波日記』中に「北尾氏『裸体論』」の記載がある。

さらに次郎は, 明治22年(1889)創刊の独文誌『東漸新誌』(ドイツ名:»Von West nach Ost«)の会員でもあり, 同誌にも何か発表しているかも知れない。

しかしながら, 現在までいずれもその存在は確認できなかった。

II. 参考文献

1. 邦文
板倉聖宣, 木村東作, 八木江里:『長岡半太郎伝』, 朝日新聞社 昭和48年(1973)。
稲垣乙丙:「故農科大学教授正四位勲三等理学博士北尾次郎先生の略伝」, 『科学世界』1-3, 1-4。
巖谷小波:「小波日記」, 『川上眉山・巖谷小波集』, 明治文学全集 20, 筑摩書房 昭和43年(1968)。
岡田武松:「北尾博士の颶風論」, 『測候瑣談』, 岩波書店 昭和8年(1933), p.13-16。
岡田武松:「北尾次郎先生」, 『統測候瑣談』, 岩波書店 昭和12年(1937), p.277-281。
岡田武松:『気象学の開拓者』, 岩波書店 昭和24年(1949), p.207-212。
桑原雙蛙:「北尾次郎の生年月に就て」, 『伝記』昭和17年(1942)10月15日号, p.31-35。
桑原羊次郎:『北尾次郎博士の逸話』(手稿), 松村家蔵。
桑原羊次郎:『島根県画人伝』, 島根県美術協会 昭和10年(1935)。
佐々木忠次郎(談):「北尾理学博士逝去」, 『東京朝日新聞』7565号, 明治40年(1907)。
佐野正巳:「洋学者と内村鱸香」, 『国学と蘭学』, 雄山閣 昭和48年(1973), p.181-203。
佐野正巳:「留学前の北尾次郎・松江藩洋学列士録 1」, 『図書新聞』1981年7月18日号。
『島根県百科事典』, 山陰中央新報社 昭和57年(1982)。

- 『東京帝国大学学術大観』, 東京帝国大学 昭和17年 (1942).
- 『東京帝国大学五十年史』, 東京帝国大学 昭和7年 (1932).
- 鳥谷部春汀: 「北尾博士」, 『春汀全集』 3, 博文館 明治42年 (1909), P.199-207.
- 中村清二: 「故北尾博士」, 『物理学周辺』, 河出書房 昭和13年 (1938), P.225-232.
- 『日本科学技術史大系 1 通史(1)』, 第1法規 1964, P.580.
- 『日本の数学100年史 上』, 岩波書店 1983.
- 『日本の物理学史 上 歴史・回想編』, 東海大学出版会 1978.
- 『松平定安公伝』, 松平直亮伯 昭和9年 (1934).
- 松村鏱豊編: 『北尾次郎 松村鏱 記念帳』, 松村家私家版 昭和6年 (1931).
- 三宅艶子: 「北尾夫人」, 『ハイカラ食いしんぼう記』, 中公文庫 昭和59年 (1984), P.142-151.
- 三宅雄二郎: 「陸, 北尾, 綱島, 升本」, 『偉人乃跡』, 丙午出版社 明治43年 (1910), P.173-175.
- 桃 裕行: 「松江藩の洋学と洋医学」, 『日本医史学雑誌』 1303-1305, 昭和17年 (1942).
- 米田正治: 『島根県医学史覚書』, 報光社 1976.
- 米田 稔: 『北尾先生の思出』 (手稿), 松村家蔵 (昭和15年3月3日の日付あり).
- 「理学博士北尾次郎氏逝ク」, 『気象集誌』 26-9, 明治40年 (1907), P.289-292.
- 脇田 裕: 「北尾次郎」, 『明治百年 島根の百傑』, 島根県教育委員会編 昭和43年 (1968), P.274-281.
2. 欧 文
- ABBE, Cleveland: »Recent Progress in Dynamic Meteorology«, Wasington 1880.
- ABBE, Cleveland: »Meteorology <, »Encyclopedea Britannica« 10th. Edition, Vol. 30, 1902, esp. P.717.
- ABBE, Cleveland: »Meteorology <, »Encyclopedea Britannica« 11th. Edition, Vol. 18, 1910/11, P.264-291, esp. P.283.
- HAURWITZ, Bernhard: »Die Arbeiten zur Dynamik der Atmosphäre von Diro Kitao <, »Gerlands Beiträge zur Geophysik« Bd. X X I, 1929, P.81-102.
- KÖNIG, Arthur: »Das Leukoskop und einige mit demselben gemachte Beobachtungen <, »Annalen der Physik und Chemie« Bd. 17, 1882. P.990-1008.
- KÖNIG, Arthur: »Zur Abwehr gegen Herrn Diro Kitao <, »Annalen der Physik und Chemie« Bd. 27, 1886, P.679-680.
- KRIES, J.: »Diro Kitao/Zur Farbenlehre<, »Beiblätter für Physik und Chemie« Bd. IV, 1880, P.51-53.
- TAMURA, S. Tetsu: »A Memoir of Professor Diro Kitao <, 『気象集誌』 26-9, 明治40年 (1907), P.1-10.

「知られざる北尾次郎-物理学者・小説家・画家-」正誤表

ページ等	誤	正
p. 58 / 2行目	昭和44年	昭和54年
p.61 / 29行目	東京開成学校	東京の開成学校
p. 62 / 7行目	PHILOSOPHIE	PHILOSOPHIAE
p. 62 / 8行目	ARTHUM	ARTHIUM
p. 62 / 32行目	留枝子	留枝子(留英子)
p. 62 r 22行目)Beiträge zur Theorie der Erdatomo-)Beiträge zur Theorie der Bewegung der Erdatomo-
p. 71 / 26行目	北尾家	松村家
p. 73 r 12行目	岩波書店	鐵塔書院